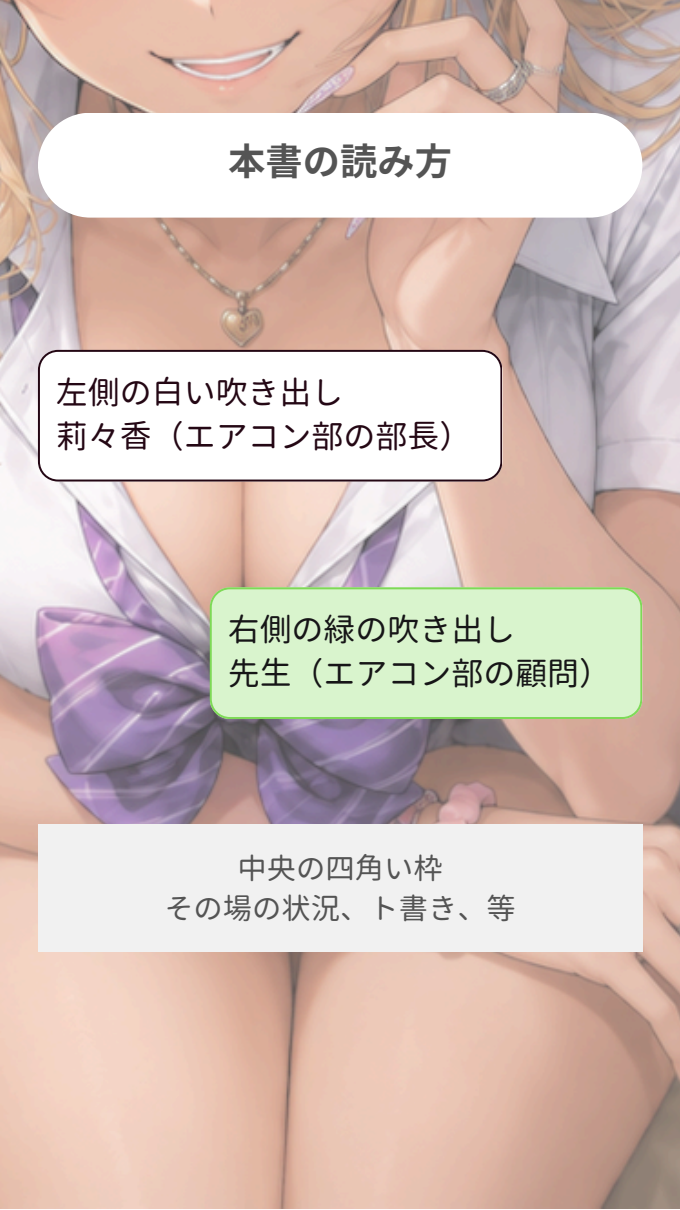




# エアコン部の ギャルお嬢さまに

部室のソファで  
温度調整棒を  
(50%)  
ずぶずぶされる話。



## 本書の読み方

左側の白い吹き出し  
莉々香（エアコン部の部長）

右側の緑の吹き出し  
先生（エアコン部の顧問）

中央の四角い枠  
その場の状況、ト書き、等



## エアコン部、、、？

私は頭を抱えながら、部室に向かっていった。

学園の理事長から、「エアコン部」の顧問を担当するように命じられたばかりだ。どうやら「市場調査」を目的とした部活のようだが、中身がまったく分からない。

自由な空気の学園なのは結構だが、わけのわからない部活やサークルが乱立されると、顧問の仕事が増えてしまうのが悩みのタネだ。

エアコン部の扉を開けると、キンキンに冷えた空気があふれ出してくる。

寒ッ！

思わず声が漏れた。

部室は、エアコンがガンガンに稼働し、高級ソファでギャルっぽい生徒がごろごろとくつろいでいた。

ん〜？

あ、ドア開けっぱなしにしないで〜  
冷気が逃げちゃうじゃん

高級ソファに深々と埋もれていたギャルが、ブランケット（よく見ると超高級ブランドのロゴが入っている）を肩まで引き上げながら、チラリとこちらを見た。長いデコネイルの指先でスマホを操作しつつ、面倒くさそうに体を起こす。

……もしかして

理事長が言ってた新しい顧問の先生？  
ちわーす

……あ、ああ

今日からエアコン部の顧問を担当  
することになったんだが……

あはっ、かた〜い！

先生、顔マジすぎ！

ほらほら、早く入って扉閉めて！

今、室温設定16度にしてるからさ〜

(16度！？ 真冬か！！)

身震いしながら足を踏み入れ、大急ぎでドアを閉める。

部屋の中はまさに極寒。

だが、目の前のギャルはなぜか、モコモコしたハイブランドの秋冬物ニットカーディガンを着込んで、ぬくぬくとした顔をしているのだ。

えっと……

一応、自己紹介してもらってもいいか？

あ、そっか！

ウチは

神条 莉々香

(しんじょう りりか)

高等部2年！

ちなみにこのエアコン部の部長兼

唯一の部員で一す

よろしくね、先生♪

莉々香はソファから立ち上がると、バッチリメイクの目を細めてパチッとウインクしてみせた。

だぼっとした高級ニットの袖から覗く手元には、ゴールドのアクセサリーがジャラジャラと輝いている。

神条……って、あの家電大手  
『神条HD（ホールディングス）』  
の……？

そそ！ パパの会社

でさ、先生さっき『市場調査』  
とか聞いて困惑したでしょ？

超ウケるんだけど



莉々香はクスクス笑いながら、サイドテーブルに置かれた最高級エスプレッソマシン（なぜ部室にある？）から、ほかほかと湯気の立つカップを淹れてこちらに差し出してきた。

はい先生  
温かいアールグレイ  
寒いでしょ？

（寒くしてるのは君なんだが……  
と思いつつ受け取る）

……ありがとう

で、市場調査って一体……？

あー、それね！

ウチの会社が今開発してる

『次世代スマート空間空調システム』  
のフィールドテスト！

高温多湿の日本の夏において

いかに快適な『極寒チル空間』を  
作り出せるか……

っていう、超真面目な研究なワケ

莉々香は胸を張って堂々と言い切った。

……ただエアコンをガンガンにして  
夏場に秋冬ブランド服を着て  
ダラダラしたいだけに  
聞こえるんだが？

酷っ！？

核心突かないでよ先生！

……まあでも、半分正解？

だってさー

猛暑の夏に極寒の部屋で

可愛い冬服着て

温かい紅茶飲んでダラダラするの

最高にアゲじゃん？

これぞ真のラグジュアリーだよ

お嬢さま学園の圧倒的財力と、自由すぎる校風が、最悪（？）の形で融合していた。

あ、ちなみに先生

顧問になったからには

ウチの『極寒チル環境における購買

意欲の変動データ』の提出書類

先生の名前で出しておいてね～

……俺の仕事  
めちゃくちゃ増えてないか！？

胃の痛い俺の顧問生活が、キンキンに冷えた部屋でひっそりと開幕した。

……失礼するぞ

俺は半ば諦め顔で息を吐き出すと、莉々香がブランケットにくるまっていた高級ソファの空きスペースに腰を下ろした。すり鉢状にぐっと沈み込む最高級の革張りソファ。そのたわみに引き寄せられるように、自然と莉々香との距離が縮まる。

ずずっ、とアールグレイを飲む。身体の内側からじわりと熱が広がり、極寒の室内に奪われていた体温がゆっくりと蘇ってくるのが分かった。

はぁ……温まる……

でしょー？

16度の部屋で飲むホットアールグレイ  
マジで神なんだって！

ふと、ブランケットの裾から伸びていた  
莉々香の足が、俺の膝あたりにカサッと触  
れた。

……あ

ん？

冷え切った部屋の空気とは対照的に、モコ  
モコの靴下に包まれた彼女の足先からは、  
驚くほどポカポカとした温もりが伝わって  
くる。

……莉々香、足、温かいな

え？ あー……まあね！

ウチ、この部屋にずっといるから  
足元だけは超嚴重に保温してんの

カシミア靴下超あったかいよ？  
触る？

莉々香は悪びれもせずクスクスと笑うと、  
逃げるところか、むしろ暖を取るようにさら  
に足をこちらにくっつけてきた。  
ブランケットの中から、彼女が着ている高  
級ニットの上品な甘い香りがふわりと漂  
う。

ちょっと待て、距離が近くないか？  
一応、俺は教師で……

えー？

だって先生、寒そうでしょ？

顧問の先生が初日で凍死されたら  
困るし～

ウチの『人身暖房システム』って  
ことで、大人しく温まりなよ

都合のいいシステムだな

文句を言いながらも、そのじんわりとした  
温もりがありがたくて、俺は冷えた足元を  
退かすことができなかった。

ねえ先生

これから毎日

放課後はここに来てよね



莉々香はソファにもたれかかり、温かいエスプレッソカップを両手で包み込みながら、いたずらっぽく微笑んだ。

データ入力の手伝い……  
じゃなくてさ

二人で飲む紅茶の方が  
絶対に美味しいし

莉々香はソファにもたれかかり、温かいエスプレッソカップを両手で包み込みながら、いたずらっぽく微笑んだ。

ちょっと莉々香……  
リモコンに手を伸ばすな、待て

俺の制止も虚しく、莉々香はデコネイルを  
ピッと動かしてエアコンのリモコンを操作  
した。電子音がピッピッ、と虚しく響く。

『設定温度：14℃』

……バカなのか！？  
14度はもう室内じゃなくて  
冬の雪山なんだよ！

あははッ！  
先生リアクション超いい！

大丈夫だって  
ここからが本番だから！

部屋の空気が一気に一線を越え、肌を刺すような極寒が押し寄せてくる。  
吐く息がうっすらと白くなり始めた。

ほら、先生固まってないで！  
マジで風邪ひくから中入って！

莉々香はソファの上でブランケットをバツと広げると、俺の背中に力任せに巻きつけて引き寄せた。

「お、おい……！」

寒いのも無理でしょ？  
うちもヤバいから、くつつくよ！

ブランケットの中にふたりで包まれると、  
莉々香の華奢な体がぴったりと密着してきた。

カシミアの柔らかい質感と、彼女の体温、  
そして甘い香水とアールグレイの香りが混  
ざり合って、ブランケットの中だけが異様  
なほど温かい密室と化す。

密着した肩や太ももから、ダイレクトに熱  
が伝わってくる。

……近すぎるだろ、莉々香

しょうがないじゃん  
14度なんだから

……てか先生  
心拍数上がってない？  
寒さのせい？

莉々香は悪戯っぽく上目遣いで覗き込んできた。バッチリメイクの瞳が至近距離でこちらを見つめている。

……調査のためだ  
余計なことを言うな

俺は震える手で膝の上のノートPCを開き、かじかむ指先でキーボードを叩き始めた。

### 【エアコン部・研究データログ】

- 室温設定：14℃（※安全ラインギリギリ）
- 対象者間距離：0cm（※同一ブランケット内密着状態）
- 被験者（莉々香）の体温：非常に暖かい。カシミア靴下の保温効果絶大。
- 顧問の心拍数：測定不能（※環境要因か心理的要因か要検証）

え〜？

先生、なんて打ってんの？  
見せて見せて

莉々香がさらに距離を詰め、俺の肩にアゴを乗せるようにして画面を覗き込んできた。

柔らかい髪が頬にかかってくすぐったい。

こら、覗くな  
……『環境要因により、顧問の精神的ストレスが極限に達している』って書き足すぞ

ウケる！

ストレスじゃなくて  
ドキドキしてるだけでしょー？

莉々香は満足そうにクスクス笑うと、ブランケットの中でぎゅっと俺の腕を抱きしめ直した。

ね、先生  
14度の部室も  
案外悪くないでしょ？

キンキンに冷えた部屋と、ブランケットの中の甘くて熱い空間。  
俺は大きなため息をつきながら、この狂った市場調査のデータを黙々と打ち込み続けるしかなかった。

……ッ

莉々香の体温と甘い香りが容赦なく密着し、さらにブランケットで覆われた密室状態。

おまけに14度という極寒と、目の前のお嬢さまギャルからの無防備な密着という極限のストレス（と刺激）が重なり、体の生理現象が情けなくも完全に暴走を始めてしまっていた。

（マズい……ッ！ マジでマズい！）

俺は冷や汗をダラダラと流しながら、必死に体を「もぞもぞ」と動かし、ノートPCの位置を少し下げて太ももの上に深く置き直した。

姿勢を微妙に変え、なんとかその「熱く硬くなってしまった存在」を莉々香の体に触れさせないように、必死に位置を調整しようとする。



頭の中では、素数でも数えて冷静さを取り戻そうと必死だった。

(2、3、5、7、11、13……  
落ち着け俺  
俺は教師だ  
相手は生徒だ  
これは市場調査だ……！)

しかし、同一のブランケット内でゼロ距離になっている以上、そのわずかな「もそもぞ」とした動きは、莉々香に伝わらないはずがなかった。

……ん？  
先生、どうしたの？  
なんかさっきから  
モゾモゾ動いて……

な、なんでもない！  
ちょっと腰の位置を直した  
だけだ！

ふーん……？  
でも、なんか先生の体  
さっきよりめっちゃ熱くなってない？  
  
14度なのに汗かいてるし

莉々香は不思議そうに首を傾げると、さらに密着度を増しながら、ブランケットの中でゴソゴソと動いた。

ちょっと先生  
寒いのが我慢して  
無理に力入ってんじゃないの～？

おい莉々香、動くな！  
じっとしてろ！

えー？ だって……  
んっ……？

ブランケットの中で莉々香の太ももが、俺の太ももの間に滑り込んできた、その瞬間。

ノートPCの下、必死に隠していた「カチカチに熱くなったそれ」が、莉々香の柔らかい太ももの付け根あたりに、コリッとダイレクトに当たってしまった。

(……………)

(……………)

一瞬で、部室の空気が凍りついた。  
14度の冷氣よりも遥かに冷たい緊張感が走る。

莉々香の動きが完全に止まった。  
上目遣いでこちらを見上げてくる彼女の瞳が、パチパチと瞬きをする。

……ねえ、先生

ち、違うんだ莉々香！  
これは……

生理現象というか  
その……！

寒さによる  
血管の収縮と拡張で……！

一瞬で、部室の空気が凍りついた。  
14度の冷氣よりも遥かに冷たい緊張感が走る。

莉々香の動きが完全に止まった。  
上目遣いでこちらを見上げてくる彼女の瞳が、パチパチと瞬きをする。

……これってさあ

莉々香の顔が、バッチリメイクの上からでも分かるくらい、みるみるうちに耳まで真っ赤に染まっていく。  
さっきまで余裕たっぷりだったギャルの表情が完全に崩壊していた。

……なに『温度調整棒』とか  
言いたそうな顔してんの  
バカ先生ッ/////！！

言っていないだろ！  
今お前が心の中で  
命名したんだろ！！

触ってるじゃん！  
当たってるじゃん！  
固くて超熱いんだけどッ！！

だから動くなと言ったんだろーが！  
俺だって必死に悟られないように  
抵抗してたんだよ！

ブランケットの中は、冷房14度の部屋の中  
だというのに、二人分の爆発的な熱気と恥  
ずかしさで狂いそうなほどの高温に包まれ  
ていた。

うわっ……  
ちょっと  
莉々香待てって……ッ！

動転した莉々香が慌てて身を引こうとした瞬間、ブランケットの裾が足に絡まり、二人の体勢が大きく崩れた。

ドサッと重い音を立てて、俺は高級ソファの背もたれに倒れ込み、その上に莉々香が重なる格好になる。

きゃっ……！

あたたた……

もつれ合い、体勢を崩した莉々香の顔が、あろうことかノートPCがずり落ちた俺の股間——カチカチに熱を帯びた『温度調整棒』の真上にズボッと埋まる形になってしまった。

……っ//////！？

お、おい！  
莉々香、退け！  
早く離れろ……！

俺は慌てて彼女の肩を掴んで押し返そうとした。

だが、顔を埋めたまま固まっていた莉々香は、身動きを止めたまま……スウツと、深く息を吸い込んだ。

ズボンの布地越しに伝わる、彼女の温かい呼気。

そして、密閉されたブランケットの中で充満していた、俺の体温とほのかな男の匂い――。

……ツ、はあ……っ……



莉々香の喉から、小さく艶っぽい吐息が漏れた。

顔をうずめたまま、彼女はハッと正気に戻ったように顔を跳ね上げる。

その顔は、髪もメイクも乱れ、耳どころか首筋まで真っ赤に熟し切っていた。

……ん、な……  
なにこれ……っ/////

な、何って……  
匂い吸い込んだろ今！？

す、吸ってないし！  
たまたま呼吸しただけだし！！

莉々香は必死に否定しようとするものの、  
うっとり潤んだ瞳は完全に定まっておらず、  
胸を大きく上下させて呼吸を荒らげている。

冷房14℃の極寒の部室だというのに、彼女の  
吐息は熱く、股間に押し当てられた顔の  
体温がダイレクトに伝わってきた。

……なんか、先生の匂い……  
すごく、熱くて……  
頭バカになりそう……っ/////

莉々香……っ！

ウチの……『温度調整』  
……全然効いてないじゃん……  
バカ……ッ

莉々香はとろんとした瞳で俺を見下ろすと、恥ずかしさに耐えかねたように、もう一度その熱い顔を『それ』にぎゅっと押し付けてきたのだった。

すうー……

はあ……っ……ん……

莉々香はズボンの布地に頬と鼻先を擦り付けるようにして、さらに深く、何度も息を吸い込み始めた。

高級ブランドの柔軟剤とアール 그레이の甘い香りに混ざって、ズボン越しに漂う俺の熱い匂い——それを貪るように吸い込むたび、彼女の体温がどんどん上がっていくのが伝わってくる。

お、おい……

莉々香、本当にやめろ……ッ！

吸いすぎだろ……！

俺は完全にフリーズしていた。  
頭の中の思考回路はショートし、指先ひとつ動かすことすらできない。  
股間に集中する圧倒的な熱量と、その上で  
「すー、はー」と熱い吐息を漏らすお嬢さまギャル。  
体が緊張と快感でカチコチに強張ってしまい、文字通り金縛りに遭ったように固まってしまう。

……ふふ、先生……っ

顔を埋めたまま、莉々香がブランケットの中で身震いするように身体を濡らし、くすっと小さく笑った。  
その声はどこかトロリと甘く、完全にトランス状態に入っている。

……なに固まってんの……？  
身体、カチカチじゃん……

……誰のせいだと  
思ってるんだ……ッ！  
動けないんだよ  
お前がそんな……ッ

俺が必死に声を開くと、莉々香はゆっくりと顔を上げ、ズボンの上に乗ったまま、うるんだ瞳でニヤリと挑発的に口角を上げた。

バッチリメイクの目元が赤く火照り、吐く息は白いどころか熱気で揺れている。

あはっ……  
ウチが聞いてんのは  
身体のことじゃないし……っ

そう言うと、莉々香はゆっくりと自分の手を伸ばし、俺の股間で熱く存在感を主張している『それ』を、服の上から包み込むようにギュッと握りしめた。

ぐうッ……！？

ねえ、先生……

『硬くなって動けない』のは……  
身体じゃなくて  
こっちでしょ……？ ツ/////

り、莉々香……っ！  
お前、何触って……！

超力チカチじゃん……っ  
14度なのに、ウチの手より  
全然熱いし……

脈打ってる……っ

莉々香は指先に力を込め、硬くなったソレの感触を確かめるようにゆっくりと撫で摩った。

自分の言ったセリフのあまりの破廉恥さに、言った本人の顔が爆発しそうなくらい真っ赤に染まっていく。

顧問の先生のくせに……

生徒の目の前で  
こんなに『温度調整棒（ちんぽ）』  
カチコチにして……っ！

どう責任取ってくれるの……  
バカ……っ/////